

教会会報

いずみ

復刊第31号

特集

『3年連続教会全体研修会 2年目』

知恵ある人の教えは命の“いずみ”である。(箴言13章14節)

編集：愛宕町教会・総務部 発行者：矢野俊介 発行所：甲府市北口3-4-23 日本基督教団愛宕町教会 TEL 055-253-3150 URL <http://www.geocities.jp/atagomachikyokai/>

みことば

忍耐をもって

聖書 テサロニケの信徒への手紙一 第5章12～15節

愛宕町教会協力教師 矢野 尚子

兄弟たち、あなたがたに願います。あなたがたの間で労苦し、主に結ばれた者として導き戒めている人々を重んじ、また、そのように働いてくれるのですから、愛をもって心から尊敬しなさい。互いに平和に過ごしなさい。兄弟たち、あなたがたに勧めます。怠けている者たちを戒めなさい。気落ちしている者たちを励ましなさい。弱い者たちを助けなさい。すべての人に対して忍耐強く接しなさい。だれも、悪をもって悪に報いることのないように気をつけなさい。お互いの間でも、すべての人に対して、いつも善を行うよう努めなさい。

(テサロニケの信徒への手紙一

第5章12～15節)

教会生活をしています。私たちは、「ぜひ教会においでください。一緒に礼拝しませんか？」と呼びかけることがあります。また表だって呼びかけないとしても、教会生活を続けることを通して、「この生活を大切にしています」と伝えているようなところがあります。教会

生活とはどのようなものでしょうか。

この生活には様々な困難が生じることもあります。お互いの間に問題を抱えたり、迷って信仰に確信がもてなかったり、道を外れそうになったり、弱って力が入らなくなったり、順風満帆というわけにはいきません。そんな時私たちはどうしたらよいのでしょうか。また教会の友が迷っていたら、どのように励ますことができるのでしょうか。パウロの言葉から、教会の姿から聞きたいと思えます。

★

まずパウロは教会の人たちに「兄弟」と呼びかけます(12節)。親しい呼びかけです。血のつながった家族というつながりを超えて、主イエス・キリストのおかげで神の子とされ、兄弟とされた喜びを分かち合うような響きが伝わってきます。パウロは、テサロニケ教会の人たちを「兄弟」と呼びましたが、時を超えて私たちに「兄弟」と呼びかけてくれています。教会生活を考える上でまず大事なことは、私たちが「兄弟」という

事実です。身寄りがなく、一人で何とか乗り切っていかなければというのではなく、大事な家族の一員だということです。主にあって兄弟とされ、家族として結ばれている。そういう交わりの中に入れられていることが教会生活の土台です。

さてその呼びかけの後、パウロはまず教会の「労苦し、主に結ばれた者として導き戒めている人々を重んじ」るように願っています。教会の中で労苦している人、主にあって教会を指導する人、そして訓戒、戒める人を重んじるように。これは教会の中で労苦を引き受けている人たちが全体を指しています。紀元1世紀、イエス様の十字架と復活の出来事から20～30年後のテサロニケ教会においても、今と同じように教会のために労苦を惜しまず、自分を投げ出す用意のある人たちが教会生活をしてきたことを聖書から教えられます。

ある人はこれは長老職に就いている人のことだと言います。またある人は教会の中で奉仕するすべての人をさしていると言います。いずれにしてもこうした教会の奉仕、教会に仕える働きを軽んじることのないように示されています。教会生活を続けていくと、教会の中に実に様々な奉仕のわざがあることを知らされます。目につきにくい働きもあります。けれどもそう

した目立たない小さな働きも含めて、すべての教会のわざを心を込めて大切に行い、奉仕する互いを「重んじ」認め合うように勧められています。

「また、そのように働いてくれるのですから、愛をもって心から尊敬」するように勧められます(13節)。「心から」は「この上なく」という言葉です。愛をもってこの上なく尊敬するようという最大の尊敬が勧められています。人間的に見て尊敬できる資質があるからではなく、ただその働きのゆえ、神さまによってその働きに召されているゆえに尊敬を、というのです。「互いに平和に過ごしなさい」(13節)の平和も、教会の中の一つ一つの働きを、尊敬をもって認めることから生まれるものです。自分の働きが誰にも認められていないと感じる人は意欲を失い、他者を責めるようになりませんが、互いを配慮し合い、健やかな群れが建て上げられるところには平和が生まれます。

★

けれどもこの箇所を読んで、戸惑いを感じる場合もあるように思います。パウロは、またテサロニケ教会はこういう美しい交わりを作ることができたかもしれないけれど、イエス・キリストの時代から二千年、時代も社会の情勢も異なる現代の私たちも同じようにできるのだろうか

か。パウロの言葉はどこか表面的なとりつくりつたものではないか。パウロの示すこういう教会の姿と自らの姿を比較して、私たちはそこに距離を感じます。“私たちはこうした群れではないかもしれない” 私たちの中に教会の奉仕者を重んじ、愛をもってこの上なく尊敬すること、互いに平和に過ごすことへの不安や戸惑いが生じることがあるということです。そしてそれは私たちの罪の姿、罪ある自分であるということと無関係ではないでしょう。

パウロはそういう私たちを知っているかのように言葉が続けます。「怠けている者たちを戒めなさい。気落ちしている者たちを励ましなさい。弱い者たちを助けなさい。すべての人に対して忍耐強く接しなさい」(14節)。

教会の中に「怠けている者たち」「気落ちしている者たち」「弱い者たち」がいることをパウロはよく承知していました。「怠けている者たち」は、自分で働くことをやめてしまった人たちのことです。この人たちの様子は「怠惰な生活をし、少しも働かず、余計なことをしている者がいる」と描かれています(Ⅱテサロニケ3章11節)。テサロニケ教会の中には、イエス・キリストが今すぐにでも天から再び来られるという切迫した再臨信仰がありました。再臨がもう

すぐ来るのだから、もはや地上であくせく働いても仕方ない。今までのように働くことをやめて、教会の人たちの援助で暮らしていこう、と考える人が出てきていたのです。その人たちは自ら働くことをやめてしまっていました。

当然のことながら、その人たちの行動は規範を失い、節度を失います。そういう人たちを戒めるように、諭すようにとパウロは勧めます。自分の生活を生きていくことをあきらめてしまった仲間に対して“あなたはあきらめることなく、粘り強く説き続けるように”こちらがあきらめてしまいそうになる時、私たちを励ましてくださるのは十字架の主の姿です。十字架の主が忍耐をもって私たち罪ある者をとりなしてくださるので、私たちも落ちついて諭し続けることができるようにされています。

二つ目に「気落ちしている者たちを励ま」すと言われます。臆病な人、小心な人、テサロニケ教会の中にこういう事情があつたのかはわかりませんが、小心な人たちのことをパウロが知っていて、勇気づけ、受け入れるように勧めています。私たちが臆病になつている時、気が小さいと言われるような状況に陥っている時、主にある励ましがどんなに力になるかわかりません。“十字架にかかつてまで

私たちをとりなして、愛してくださるお方が一緒にいてくださる”。そう励まし合うように勧められています。

三つ目は「弱い者たちを助けなさい」です。信仰上の弱さを抱える人のことです。パウロはローマの信徒への手紙やコリントの信徒への手紙で「信仰の弱い人」のことを書いています。それは異教の祭壇に捧げられた肉を食べることに信仰上の戸惑いを感じる弱い人のことです。パウロはそこで、“何を食べても自由だ”と考える強い人が、弱い人を批判してはならないと論じています。テサロニケ教会でも、この肉を食べる食べないの問題があつたかどうかはわかりませんが、信仰上の弱さを抱える人を置き去りにしてはならないと示されています。

そして14節の結びはすべての人に「忍耐強く」接するように、とあります。誰もが誰に対しても忍耐強くあるように。元の文は“すべての人を辛抱しなさい”となっています。この忍耐強くある、辛抱する、ということとパウロはコリントの信徒への手紙13章で愛の性質としてあげています。“愛の賛歌”と呼ばれるこの箇所では「愛は忍耐強い」と語られます。忍耐強く教会の交わりを形造るために“愛”が必要です。けれどその“愛”が私たちに由来しないことを、私たちは

日常生活の様々な場面で経験し、愛のない行動や言葉を反省させられます。ここでパウロが言う忍耐の根拠となっているのは、主イエス・キリストの愛です。救い主が自らをささげて十字架の死をとげてくださった犠牲の愛が私たちの忍耐の土台です。十字架の主への信仰に生きる時、罪赦された、との宣言を聞く時に、忍耐強く交わりをつくる“愛”を与えられます。

最後の15節には、「だれも悪をもつて悪にむくいることのないように気をつけなさい。お互いの間でも、すべての人に対しても、いつも善を行うよう努めなさい」とあります。“目には目を”、“やられたらやり返せ”という教えは私たちの身近にありますし、“対話ではなく圧力を”と迷いなく言い切る為政者もいます。“被害を受けたらやり返しても当然”、という風潮は珍しくないと思います。そうした中で、「だれも悪をもつて悪にむくいることのないように」という教えが語られます。さらに積極的に、悪を返さないばかりか、“お互いの間でも、すべての人に対して、いつも善を行うよう”努力せよと述べられています。元の文では“善を、善いものを追いかけなさい”となっています。

ここで言う善とは何でしょう？ 私たちが追いかけて、追求める良いもの、正に究極の良

いものは、イエス・キリストのお方に他なりません。世界にどれ程美しく、善なるものがあるとしても、キリストほど美しく良い方はありません。キリストこそ、私たちの追い求め、見つけ続ける善なるお方です。このお方を追いかけるとは、このお方を見つめ続け、信頼申し上げるということです。

★

教会生活とはどのようなものか、なぜその生活を歩むのか、パウロが教える言葉を聞いてきました。教会生活にまずきをおぼえる時には、何よりもまず聖書のみ言葉に立ち帰ることを求められています。み言葉を通して私たちの道は示されています。み言葉から、最も良いお方であるイエス様のお姿を示されて、このお方の弟子とされた者として歩み出したいと願います。私たちは小さな器に過ぎませんし、神さまはそのことをご承知です。けれどもこの私たちを神さまは選んでくださって、主の弟子の一人とされました。“あなたが教会に必要だ。あなたがこの教会の群れの大事な一人だ”と呼びかけてくださっています。神さまは、み子を十字架にかけるほど私たちを愛してくださいました。み子イエス・キリストの弟子として、主に仕え、与えていただいた一つ一つの務めを忠実に、忍耐をもって果たしたいと願います。

御言に聴き、待ち望む

旧約聖書 ハバクク書 第2章

ハバククの憂いを含んだ祈りに学ぶ (2)

《講師》 宍戸 俊介 牧師



2017年教会全体研修会
3年連続研修会（2016年・2018年）

2017年9月10日（日） 礼拝後

講師よりのメッセージ

最初に、何故ハバクク書を学ぶのかを、もう一度おさらいしておきます。一昨年の研修会では、教会の現在を考えると、教勢（現任陪餐会員の数・礼拝出席・受洗者数など）で測ることができないと申し上げました。なぜなら数字は、時代の風向きによって、上がったりがつたりするものだからです。時代の波に乗ってサーフィンすることが教会のなすべきことかと言えば、そうではないでしょう。むしろ、今の時代の中にあるわたしたちの教会の姿を、聖書の御言の中に見出すことが大切と考えています。ハバクク書の構成

木田献一教師（元山梨英和学院院長）による

《1章1節～2章4節》

預言者（ハバクク）の祈りと主（ヤーウエ）の答え

1年目

《2章5節～20節》

高ぶる者（カルデヤ人）の罪

2年目

《3章1節～19節》

讚美の歌

3年目

ハバクク

「もうひとつの幻」を見る人

主はわたしに答えて、言われた。「幻を書き記せ。走りながらも読めるように。板の上にはつきりと記せ。定められた時のために。もうひとつの幻があるからだ。それは終わりの時に向かって急ぐ。人を欺くことはない。たとえ、遅くなっても、待つておれ。それは必ず来る、遅れることはない。（2章2～3節）

ここには、ハバクク書が何のために執筆されたのか、誰に向けて書かれたのかということが述べられている。ハバククという預言者は、エレミヤと同時代の人。つまり、ネブカドレツアルがバビロニア王として即位し、当時の大国であるアッシリアを滅ぼし、さらにはパレスチナ地方にまで覇権を伸ばし、遂には南ユダ王国を呑み込んでゆく時代。今年聞く「高ぶる者（カルデヤ人）の罪」は、主として、日の出の勢いのバビロニアに対する批判。

しかし、何のためにそのような批判をしたのか？—南ユダ王国が併呑されて癪だから、という理由ではない。そうではなくて、時代の勢いは常に移り変わるということがあるため。ハバククは時代がどんなに移り変わるうとも、いつの時代にもおられる永遠の神様の真実に立つことを教える。

ハバククは、多くの人々が心を奪われているバビロニアの隆盛とエジプトの衰退という現実とは違う、もうひとつの現実があることを知っている。

もうひとつの幻があるからだ。それは終わりの時に向かって急ぐ。人を欺くことはない。

神様が下される終わりの日の裁きと完成にまっすぐ向かって行く（「終わりの時に向かって急ぐ」）、そういう現実のあることをハバククは知っている。ただし、それは日常的な事柄の中では見えない信仰によつてのみ知ることのできる現実。それゆえ「もうひとつの幻」という言い方がされる。

★

ハバクク自身はエルサレム神殿に仕える祭儀預言者であるため、同時代のエレミヤのように、神殿の境内に立ち、声高に人々に神様の御言を訴え、神殿滅亡を預言するような務め（エレミヤ書26章）には遣わされていない。ハバククの仕事は時代の苦悩を祈りながら魂に受け止めること。

このハバククのような務めを、今日の教会は与えられてはいないだろうか？ 教会を社会運動体のように考えて、社会問題に取り組むことこそ教会の果たすべき役割という考え方が日本基督教団の中にはあるが、そのようなあり方は、人間の現実を見据えてはいないように思われる。

れる。

毒麦の間に御言の種が時かれ、麦も育つのがこの世の教会であることを主イエスは教えらる。エレミヤにはエレミヤの務めがあり、それは否定できないが、一方、ハバククにも彼なりの務めがあるのである。

高ぶる者（カルデヤ人）の罪1 ～繁栄（富・酒）は人を欺く

確かに富は人を欺く。高ぶる者は目指すところに達しない。彼は陰府のように喉を広げ、死のように飽くことがない。彼はすべての国を自分のもとに集め、すべての民を自分のもとに引き寄せる。この人々は皆、彼に対して嘲りのことわざを歌い、謎の風刺を浴びせる。（2章5～6節a）

最初の批判は「富（もしくは『酒』～口語訳聖書他）」に向けられる。「富」は死海写本に準拠。確かに富は人を欺く。また、酒は欺くものだ。（口語訳聖書ハバクク書2章5節）

これらの言葉は、バビロンに代表されるこの世的な繁栄を言い表している。バビロンの王（ネブカドレツアル）は、アッシリアを滅ぼし、また軍勢力による世界征服を企てる。

ところが、軍勢力によつては、人は本当には屈服しない。力にくじかれた者たちは、上辺だけは従うように見えるが、実際に



は力による勝利者を軽蔑する。
この人々は皆、彼に対して嘲り
のことわざを歌い、謎の風刺を
浴びせる。

ということになるのである。

そのため、ネブカドレツアル
の野望は結局、実現しないで終
わることになる。バビロニアは
ネブカドレツアルの死後、急速
に衰退する。

高ぶる者は目指すところに達し
ない。

ということになる。聖書にはこ
のように教えられている。

ところが今の時代は、まさに
力に任せて何でも有り、という
風潮が支配的ではないだろう
か。目的のために手段を選ばな
いことが今の時代ではないか。

*力での圧迫(米国と北朝鮮)
*インターネットによる匿名
化 *日本人の劣化 *モラ

ルを見失いつつある政治家や
教師、牧師

この風潮に教会も乗るのだろ
うか？ 乗らない方が幸せなよ
うに感じるが。

高ぶる者(カルデヤ人)の罪2
く略奪者は略奪によって債務を
重ねている

災いだ、自分のものでないもの
を増し加える者は。いつまで
続けるのか、重い負債を自分の
上に積む者よ。突然、お前の債
権者が立ち上がり、恐れさせる
者が目覚め、お前は彼らの獲物
にされないだろうか。まことに、
お前は多くの国々を略奪したの
で、諸国の民の残りの者すべて
がお前を略奪する。お前が人々
の血を流し、国中で不法を、町
とそのすべての住民に対して
行ったからだ。(2章6節b、8
節)

「災いだ」——ここから繰り返
し語られる。原語は「嗚呼」と
いう感嘆詞。死者を葬る際、身
内の人々が洩らす叫びの言葉が
語源とされる。ただしこれは本
心からの嘆きではなく、哀歌の
文学的形式をとった嘲笑。6節
に言われていた「嘲り」がここ
から語り出される。

「重い負債」——バビロニアが
周囲の民族から反発を買ってい
ることが負債(借金)に例えら
れている。バビロニア(ネブカ
ドレツアル)が勝利を重ねれば

重ねるほど、周辺民族の憎悪は
高まる。

高ぶる者(カルデヤ人)の罪3
くはかりごとで富を重ねる者は
告発される

災いだ、自分の家に災いを招く
まで、不当な利益をむさぼり
災いの手から逃れるために、高
い所に巢を構える者よ。お前は、
自分の家に対して恥ずべきこと
を謀り、多くの民の滅びを招き、
自分をも傷つけた。まことに石
は石垣から叫び、梁は建物から
それに答えている。(2章9、
11節)

第二の嘆き(「災いだ」)は、
軍事力を背景に不当に利益をむ
さぼり、掠め取る者に向けられ
る。自分が不正に手を染めてお
り、その容赦のなさを知ってい
るために、自分の権力は他人の
手の届かない高い所に築こうと
する。その堅固さは、自分自身
がもたらしている「災いの手」
から逃れるためである。

ところが、そうした行動は、
実は自分自身の尊厳を傷つける
恥ずべき行い。石垣の石、梁に
使われている木材といった物言
わぬ建材さえ、不当なことを訴
えて叫び出す。

11節の言葉は、エルサレム入
城時の主イエスの言葉を思わせ
る。

すると、ファリサイ派のある人々
が、群衆の中からイエスに向かっ

て、「先生、お弟子たちを叱って
ください」と言った。イエスは
お答えになった。「言っておくが、
もしこの人たちが黙れば、石が
叫び出す」(ルカによる福音書19
章39、40節)

高ぶる者(カルデヤ人)の罪4
く力の信奉者は空虚なことのた
めに尽力するようになる

災いだ、流血によって都を築き
不正によって町を建てる者よ。
見よ、これは万軍の主から出た
ことではないか。諸国の民は力
を費やしても火で焼かれるのみ。
諸民族はむなしい業のために疲
れ果てる。水が海を覆うように
大地は主の栄光の知識で満たさ
れる。(2章12、14節)

バビロンの繁栄は「流血と不正」
による繁栄である。「万軍
の主」がバビロニアの支配下に
寄せ集められた諸国の軍隊と力
を競い合う。諸国の民は戦いに
疲弊するが、それはそもそもが
「むなしい業」への参加だから
である。

人間の努力が疲弊し、潰える
ところで、「主の栄光の知識」
が力を持って大地を覆い尽く
す。そして、多くの人々は自己
実現のために生きる。それが最
善の人生だと思ひ込まされて生
きている。

ところがそれは「むなしい
業」へと動員されて過ごしてい
る生活かも知れない。自分自身

の欲求を悪い事と考え、全て封
印する必要はないけれども、自
分の願うこと、欲することが、
本当に意味のある善いことなの
かを思い返す冷静さが求められ
るのではないか。

★

教会の礼拝への出席は、わた
したちの自己実現のための業で
はない。礼拝の中で、神様をた
たえ、神様に祈り、御言を頂く
生活の中で、わたしたちは新し
くされ、清められ、慰めと勇気
を得て力づけられるということ
を経験する場合はある。

しかし、もしも礼拝が自分に
力をもたらさず生きるための手段
のように考えられるとするな
ら、それは神様の力を利用して
いるだけのことである。

本当の礼拝は神様の御前にひ
れ伏すこと。それによって、わ
たしたちは自分がどなたによつ
て形造られ、命を与えられ、ま
た何のために生かされているの
かを知ることになる。「主の栄
光の知識」が力を持ってわたし
たちを覆い、それがやがては大
地を覆い尽くすことにつながっ
ていく。

高ぶる者(カルデヤ人)の罪5
く人の尊厳を軽んじる者は自ら
の正体を晒す

災いだ、自分の隣人に怒りの熱
を加えた酒を飲ませ、酔わせて、
その裸を見ようとする者は。お

前は栄光よりも恥を飽きるほど受ける。酔え、お前も隠し所を見られる。お前のもとに、主の右の手の杯と恥辱が お前の栄光の代わりに回ってくる。レバノンに加えられた不法がお前を覆い 獣も絶えて、お前を恐れさせる。お前が人々の血を流し、国中で不法を 町とそのすべての住民に対して行ったからだ。(2章15〜17節)

15節の第二文節「自分の隣人に怒りの熱を加えた酒を飲ませ酔わせて」には、読解上の困難がある。「怒りの熱を加えた酒」は、通常、裁きにおける神様の怒りに関連づけられる。

《例》

御怒りを注いでください あなたを知らうとしない異国の民の上に あなたの御名を呼び求めない国々の上に。(詩編79編6節) あなたの憤りを注いでください あなたを知らない諸国民の上に。あなたの御名を呼ぶことのない諸民族の上に。(エレミヤ書10章25節a)

通常は、怒りの酒を飲ませるのは神であり、飲まされるのは裁きを受ける人間である。ところがここでは、怒りの酒を飲ませるのがバビロンの権力者であると言われている。これが難しいところ。

難しい点はあるにしても、ここで「酒を飲ませ酔わせる」とは、「裸を見ようとする」目的のために行われる。ナホム書

には、そのような神の裁きによる刑罰が語られる。

見よ、わたしはお前に立ち向かうと 万軍の主は言われる。わたしは、お前の裾を顔の上まで上げ 諸国の民にお前の裸をもろもろの王国にお前の恥を見せる。わたしは、お前に憎むべきものを投げつけ お前を辱め、見せ物にする。(ナホム書3章5〜6節)

これは姦淫の罪に対する裁きの様子であるが、裸をさらされ、辱められる時に、「彫像」や「鑄像」、また「偽りの教え」といった偶像礼拝に関係することがここに言われている。

ここに述べられていることは、バビロンが裁き主のようになり、周囲の諸民族の品位を落とさせることで、自分たちの栄光を求めようとしたことに関わるのかも知れない。ところが、バビロニア自身が高ぶって富とぶどう酒に酔い痴れ、自らの裸をさらしたので、求めた栄光を得ることができない。

高ぶる者(カルデヤ人)の罪6 〜偶像礼拝には答えがない

彫刻師の刻んだ彫像や鑄像また、偽りを教える者が何の役に立つのか。口の利けない偶像を造り 造った者がそれに依り頼んでも 何の役に立つのか。災いだ 木に向かって「目を覚ませ」と言い 物言わぬ石に向かって

「起きよ」と言う者は。それが託宣を下しうるのは。見よ、これは金と銀をかぶせたもので、その中に命の息は全くない。しかし、主はその聖なる神殿におられる。全地よ、御前に沈黙せよ。(2章18〜20節)

バビロニア人は託宣を求めるために偶像を考案した。彫像と鑄像が18節に出てくるが、ここには、それに加えて石に金銀でメッキした像も考えられている。いずれも、富の蓄積を誇示するもの。きらびやかに見え、人目を惹く。輝かしい神託によりお告げをもたらすことが期待されているが、実際には何も喋らない。それは木や石や金属の塊なのだから。

それが託宣を下しうるのは。見よ、これは金と銀をかぶせたもので、その中に命の息は全くない。

また、口の利けない偶像を、託宣に答え神託を出す神であるかのように吹聴する者は「偽りを教える者」たちである。

2章のまとめ

バビロニアが急速に力をつけ、古代社会を席巻する時代の中にハバククは置かれている。上辺しか見ない人には、その繁栄こそ時代の要請であり、これに乗り遅れてはならないと声高に叫ぶ。それ程にバビロニアの成功は決定的なものと感じられて

ている。

けれども、その繁栄がまことの喜びに満ちたものでないことをハバククは鋭く看取る。ネブカドレツアルの成功と勝利は強大な軍勢力を背景とする。その流血と横暴ゆえにバビロニアの成功は他の諸民族の反発を招き、ネブカドレツアルの野望は実現せず頓挫することになる。ハバククはそのところに、神様のなさりようを見出している。

神様は一時的にネブカドレツアルが率いるバビロニアに勝利を与える。しかし、後にそれを取り去られる。ハバククは、その最初と最後を見ているからこそ、今は日の出の勢いに見えるバビロニアに対して投げかけられている、哀歌の形を取った5つの嘲りの言葉が聞こえるのである。

この世の繁栄(富と酒)は人目を欺く。上辺だけの繁栄に踊らされてはならない。世界のまことの支配者である主は、神殿の中に礼拝する者たちと共におられる。礼拝する者たちが神様を侮り、神殿を軽んじたからこそ、エルサレム神殿は崩壊し滅ぼされたが、それは神様の無力のためではなく、イスラエルの懲らしめのためであり、そのために神様はバビロニアとネブカドレツアルを用いたに過ぎない。彼らが高ぶる時には、彼らもまた傲慢の罪を問われ裁かれるのである。

したがって、この章の結びでは、神様の御前に静まることと呼びかけられる。

★

全地よ、御前に沈黙せよ。

この言葉が2章の結び。時代の混乱と傲慢を見せられていると、わたしたちもつい、主よ、どうしてなのかと、何故を問いたくなる。しかし、その答えがすぐには与えられないとしても、神様に信頼して待ち望むべきことが、この章の最後の結論として述べられている。

『全地よ、御前に沈黙せよ。』――神様は、そうおっしゃることで、生意気な口を開くわたしたちをたしなめられる。しばしば出しゃばって、厚かましい口を開く子らに対して、神様はびしゃりと横っ面を殴られるのである。――今こそ、静まるが良い。大層な言葉を吐くお前の口を封じるが良い。早まって世界統治について、とやかく言わない方が良い。一体お前はそれについて、何を知っているというのか。早まって悲観してはならない。(リュティ)

この2章の結論は、ヨブ記38章〜41章に通じるところがある。時代が動き、大きく移り変わっていくように思える時には、教会は早まって右往左往しない方が良い。むしろ、礼拝をささげて御言葉に聴き、神様にこそ期待しつつ、時代の行く末を注視することが求められる。

2017年度夏期伝道実習報告

愛宕町教会での夏期伝道実習

東京神学大学大学院1年 長手 陽介



2017年7月22日土曜日の午後に愛宕町教会に到着した瞬間から、8月21日に帰京するまでの間、今までの神学校生活で経験したことが無いほどの、濃密で充実した時間を過ごさせて頂きました。今、会報「いずみ」への報告を記しながら、その一日、一日を克明に、そして懐かしく思い起こすことが出来ます。何より、穴戸先生御夫妻と教会員の皆さまのお支えがあって、今年の夏期伝道が充実した学びの時となりましたことに感謝致します。

実は、愛宕町教会での実習が始まる前は「たくさんの聖書箇所についてお話をしなければならない」という焦りの中で、思うように準備が出来ず、相当追い詰められた気持ちで甲府に到着しました。しかし、愛宕町教会に着いて教育館に荷物を降ろし、教会での暮らしが始まると、不思議とすぐに気持ちが落ち着きました。先の見通しはつきませんでした。「これから、ずっと四六時中、この教会で寝起きしながら、来る日も来る日も教会のこと、聖書のことに集中するのだ」と思うと、静かな喜びがあり、気持ちが段々と燃えてきました。皆さまが暖かく迎えてくださったので、過度の緊張でしゃちこぼっていた私の身心が解きほぐされたのでしょうか。

実習が始まると、さっそく教会学校の夏期キャンプに泊まりがけで参加したのですが、教会学校の子どもたちと一緒にになって、鬼ごっこ、水遊びに夢中になりました。「遊んであげた」のではなく、私自身が楽しく「一緒に遊んでもらった」のです。そのおかげで、教会学校の生徒たちばかりでなく、教会学校で奉仕する先生方にも親しみが湧き、愛宕町教会がぐっと身近な存在となりました。一緒に遊んでくれた子どもたち、楽しい思い出を本当に有難う！大きくなった皆さんと再会するのを、今から楽しみにしています。

夏期キャンプから帰ってしばらくすると、愛宕町教会での実習の「主戦場」であると、歴代の実習生から言い伝えられている「家庭集会」の日々が、いよいよ始まりました。私は神学校の前期の学びで、テサロニケの信徒への手紙の授業の予習に一番たくさんの時間を割いて勉強しておりました。それにもかかわらず、家庭集会のための準備をどうしたら良いのかわかりませんでした。そこで穴戸俊介先生に恐る恐る「全く準備が進んでいない」ということを打ち明けました。穴戸先生からは「赴任して現場に出たら、準備が整っていない状況の中でも、きちんと御言葉をとりつがなければならない」「準備を完璧にして恰好良く語ることが大事なのではなく、その箇所聖書が本当に言おうとしている事を聴いて、最後にアーメンと出席者が唱えることが出来る福音をとりつぐ事に集中しなさい」という趣旨のアドバイスを頂きました。これは、言うまでもなく「準備が出来ていなくても良い」という甘い言葉ではなく「御言葉をとりつぐ者は言い訳をせず、どんな状況であっても、聖書が言おうとしている事を語る事に尽きる」という意味だと思いました。ある意味、とても厳しい言葉ですが、不思議と私はこのアドバイスで落ち着きました。「事前の準備が出来ていない」という自分の失敗を見つめている場合ではないと、気がつきました。今から全身でテサロニケの信徒への手紙一の中に入り込んで、恰好が悪かろうが何であろうが、福音を掘り当てて伝える

ことだけを考えよう。そう、覚悟を決めました。「涼しい情熱」が遅まきながら、私の中に湧いてきました。

さて、そうしてスタートした家庭集会、全8回の日々。本当に夢中でした。連日、深夜まで聖書の御言葉、注解書と格闘しながら準備するのですが、いつも家庭集会に出かける直前には「顔面蒼白」だったと思います。一度、穴戸尚子先生に「まるで、ほふり場に引かれて行くようです」と（半分、冗談で）弱音を吐いたこともありましたが、皆さん、本当に家庭集会でも暖かく迎えてくださったので、「ほふり場に引かれて行く」という言葉の意味は、皆さんから厳しい「つつこみ」を受けるという事ではありません。正面から聖書の御言葉に向かって行くのですが、私自身の聖書の読み方も注解書などの道具の使い方も拙いので、固い岩にぶつかってはね返されてしまい、生命の水が湧き出る鉱脈を探り当てることが出来ません。もちろん、それが簡単に出来るとは思っていませんでしたが、自らが語る言葉が、聖書の豊かさを捉え切れていない。的を外している。だから、わかりにくい話、恵まれていない話になる。そのことが家庭集会では、逃れようもない事実として、肌身に迫ります。その事を「ほふり場に引かれて行くようだ」と感じたのです。

しかし同時に、全ての家庭集会が、その一つ一つが本当に恵みの時でした。穴戸先生御夫妻のコメント、教会員の皆さんの言葉、聖書研究の後の食事の交わりのひとときのこと。今でも私の頭の中で克明に再現出来るほど貴重な経験でした。穴戸先生が御言葉を語りなおしてくださると、皆さんのお顔に再び血が行き巡って明るくなり「わかった」という表情になりました。神学生の拙い話を出発点に、牧師も教会員も一緒になって聖書を真ん中において「この箇所は何を言おうとしているのか？」を分かち合う恵みに気がつかされました。家庭集会の主役は、私ではなくて、テサロニケの信徒への手紙一でした。そこで私という未熟な神学生が豊かに用いられるように、牧師も教会の皆さまも本当に祈り、支えてくださっている。家庭集会が回を重ねるに従って、この喜びがどんどん大きくなりました。

愛宕町教会での実習をふり返って、他にも数えきれないたくさんの事を思い出しますが、最後に総括として二つ印象に残った事を申し上げたいと思います。第一は、夏期伝道中も、穴戸先生が普段通りに礼拝、祈祷会、求道者の洗礼準備会、教理入門講座、さらに聖愛幼稚園への「御言葉の出前」など、あらゆる時にあらゆる場所で御言葉をとりつぐ現場に同席させて頂いたという事です。そのおかげで、牧師の働きの「後ろ姿」をつぶさに見る機会を与えられ、今後の貴重な財産となると思います。

第二に、特に家庭集会で感じたのですが、本当に皆さんが私の語る拙い御言葉の説き明かしに真剣に耳を傾けてくださり、豊かな交わりの時を備えてくださいました。このように多大なエネルギーを持って、喜んで夏期伝道実習生を迎えて下さる事に驚くと共に、穴戸先生御夫妻、教会員の方々への感謝の気持ちに溢れます。

終わりに、夏期伝道実習を持ち運んでくださった主に感謝致します。愛宕町教会の今後の歩みがいつそう確かにされ、主の恵みが満ち溢れますように。

編集後記

▶ 11月役員会での学びで、キリスト教が世間一般の人々に容易に受け入れられる面と、反対に簡単に受け入れられず拒否に出会う面という視点で語られる話を学んだ（『聖餐論』赤木善光著）。前者の面とは、隣人愛やその実践など。後者の反発や拒否に出会う面とは、イエスの受肉・十字架・復活の教え、バプテスマや聖餐などの sacrament。筆者は、その後者を「泥臭い」と表現している。私たちも「世の光」「地の塩」としての実践に目が行きがちである。しかし、気をつけなくてはならない。単なる隣人愛はこの世に満ち溢れている……。▶ 今回、教会全体研修会の記録を載せた。私たちが学んだのは、「時に流されてはいけない。時に動じて行動を起こす前に、右往左往せず、主に信頼して御言葉にじっくり聞く」こと、すなわち「泥臭いキリスト教にとどまれ」と言われていたような気がしている。（KS）